

フランスの比較文学

富田 仁

— その最近の動向 —

一九二一年に、バルダンスペルジェがフランスの「比較文学雜誌」創刊号の巻頭論文として「言葉と実体」^①を載せ、いわゆるフランス派の比較文学の概念規定を試みたあと、一九三一年、ポール・ヴァン・テーゲムは初めてフランスの比較文学の総括書『比較文学』^②を出し、実証主義を標榜するフランス比較文学の成果を高らかに誇示するのだった。

第二次大戦後、一九五一年、ギユイヤールも「ク・セ・ジュ文庫」でその総括書『比較文学』^③を世に問い、ここにフランスの比較文学は確乎たる地位を築きあげていられることをはっきり全世界の比較文学研究者に示した。

あまりにも実証主義に貫かれていられるフランスの比較文学に対しては、フランスの内外で無視することのできない批判が長いことみられたのは隠しがたい事実であり、アメリカ、ソビエトの比較文学はある意味ではフランスの比較文学への批判から生れ、育ったように考えられる。

フランス国内での有力な批判者として、私たちはまず第一にパリ大学のエチアンブル教授をあげないわけにはいかない。『比較は理

ならず」^④と題する著作はフランスの比較文学の危機という意識から書かれたものであるが、エチアンブルの理想とする比較文学者の姿は将来の比較文学の方向づけを知る上ですこぶる興味深いものがある。

「私はちょうどランソンが文学史家に望んだように、比較文学者が、詩、劇、小説の愛好者であることをのぞんでいる」と述べてから、チャペル・ヒルの国際比較文学大会は、フランス派の比較文学者が従来なおざりにしがちであった批評を力強く回復したこと、アメリカ派の連中がフランス派の方法の実証主義的傾向を軽蔑して否認したことなどに言及し、比較文学者の理想像を、「百科全書的天分を賦与されており、西暦二千年頃に世界で書かれることになる言葉のうち重要なものを二つ三つ識っており、内面的体験を文学的な美しさで表現するような人物」として描いている。エチアンブル自身、小説を書いているが、バルダンスペルジェは詩を、ジャン＝マリ・カレは旅行記を、ポール・アザールは小説を書いたり、書こうとしたことを例にあげて、創作体験、すくなくともその微妙な心理を実感的に理解できる才能が比較文学者には必要なのである。文学

は言葉でつくられているのだから、まず最初に言葉に対する好尚をもつべきである——この考えはエチアンブルが来日した折の講演「ことばと文学」にもうかがえることである——と説いている。

ついでエチアンブルは、比較文体論の研究が従来なおざりにされてきているが、比較文学の研究にこれを適用することこそ大切である」と云い、実際にその種の研究書がディディエ書店から刊行されることを伝えたあと、ポーランドで『文体論的観点におけるフランス語とポーランド語の比較研究』と題する研究が出たことに触れて、社会主義国の方がこの分野ではかえって卓越した業績をみせていることを指摘している。さらにエチアンブルは、「私は日本の詩に関心を寄せて主題を選ぶような人物が出ることを期待している」と、比較韻律学の分野にも注目している。

エチアンブルは東洋、とりわけ中国について広い知識をもっており、それはガリマール書店から刊行された東洋の知識叢書第十六巻『中国古典詩選集』の序文にも十分示されている。

「白は、私たちに純粋さを意味する。中国人には喪の色であり、むしろ悲哀、冷たさを表わし、たとえば白い月という表現では孤独さをよびますのだ。」

このように色彩に対するイマージュが東洋人と西洋人との間ではかなり異ったものであることをあげてから、エチアンブルはイマージュの研究の必要性を訴えている。

エチアンブルは、今後の比較文学の方向を一応は示しているが、そうした動向の背後にはあきらかに従来の比較文学、とくにいわゆるフランス派比較文学の欠陥、すくなくともエチアンブルの考える理想の比較文学からみた現状の比較文学の欠陥への批判が横たわっ

ている。そしてその批判はとりわけギュイヤールの総括書『比較文学』に向けられている。エチアンブルによれば、ギュイヤールの書物に提出されているさまざまな問題は私たちが文学から遠ざけているのである。ある時代、ある国に外国文学を伝えるのに貢献した書物と人物との研究をギュイヤールは奨めているが、テーマの運命、作家の運命、個人と流派の外国における源泉、ある国が別のある国について抱くイマージュなどの研究に数年間という歳月を費すことに、エチアンブルは批判的であり、「私はそれが厳密な意味では比較文学であるとは主張しないことだろう」と述べている。いわゆる主題史の研究は、ポール・アザールからギュイヤールにいたるまで、とかく忌避されがちであった研究主題であったが、エチアンブルは、一定の原典の綿密な研究に依拠してさえおれば、主題史研究は文学の理解に役立つとして、アザールやギュイヤールに対して批判的な立場をとっている。

エチアンブルの宣言書『比較は理ならず』の出現は、フランスの比較文学の変貌を示すものとして受けとれないだろうか。諸国文学間の関係、文学交流の歴史的事実の研究を実証的に行なうことのみならず、古記録の探索を原典のエクスプリカションに、社会学者の慎重さを美学理論家の大胆さに結びつけていく方向へと動き出しているのである。エチアンブルは、一九六二年のブダペストにおける比較文学者会議に触発されて、小さくまとまってしまうフランシスの比較文学を大きく脱皮、成長させることの使命感をその宣言書のうちにあらわしているように考えられる。もちろん、これはひとりエチアンブルの見解だけがそうなのではなく、フランスの比較文

学者たちのなかに、すでに従来の比較文学を批判してそこから新しく進むべき道を探していた人たちがいなかったというわけでないことを見落してはなるまい。たとえばジャン・マリ・カレは「この半世紀の比較文学」(一九五一年)^⑤という論文で、早くも比較文学が文学上の様式、主題、旅行および作品群の歴史、その分布、運命、影響を研究することであると規定してから、文学者の旅行の研究や一国に対する解釈の研究という領域の開拓を主張していたし、さらには比較文学が一般文学への同化に導かれるものとして、文学上の様式、主題、流行、個人的な大作品の同時的に数カ国にわたる歴史を書きあげることであると説いている。また、いわゆる主題史研究をも認めている。このようにしてフランスの比較文学はその変貌の兆をすでにみせていたのであった。この主題史研究については一九六五年、レイモン・トルーソンは『比較文学の一問題。テーマの研究。方法論試論』^⑥を刊行して、この種の研究の重要性を示した。

トルーソンは、主題史の研究があちこちで虐待されてきたが、決して滅んでしまったわけではないことを指摘して、その理由に人間は自分が見出し、追求するその神話のうちに生きていることをあげ、私たちがたえず先祖伝来の伝説のリストづくりをするのも人間の歴史を研究するためであるからだという意味の説明を加えている。

ところで、フランスの比較文学は、従来その研究領域をルネッサンス以降に限っていたが、最近ではそれが必ずしも厳守されていない。いやそれどころか、一九六五年の第七回フランス比較文学会大会はポワティエ大学と中世文明研究センターの協力のもとにポワティエで開催され、中世文学の研究に比較文学が必要であることが強調されたのである。ジャン・フラピエは、中世の文学は他の時代の

文学と同等あるいはそれ以上に比較文学の研究の対象になることを述べている。中世における諸国文学間の関係については、「中世におけるフランスとオランダの文学関係」というような論文も発表され、「円卓物語と十六世紀フランス文芸」と題する論考もその議事録に収められているというほどに、すでにフランスの比較文学は研究領域の枠を拡げているのである。

このようにフランスの比較文学は、従来はこれを禁じていた研究分野にも足を踏み入れるし、新しい領域をも開拓して変貌をみせてきているが、この変貌を促す力は厳格な実証主義に束縛されたフランス比較文学の方法へ対する反撥と批判とから生れたものなのである。エチアンブルのような内側の学者たちに加えて、アメリカやソビエトなど外側の比較文学者たちがフランスの比較文学を批判し、それがフランスの比較文学の変貌を促進させる大きな刺戟になっていたのであろう。

東ヨーロッパの比較文学の動向については、エチアンブルも少なからず関心を寄せており、たとえばイシュトヴァン・シェーテルが試みた東ヨーロッパの比較文学の可能性の諸問題に関しての要約については十分に知っていて、『比較は理ならず』でブダペストの比較文学者会議に言及したとき、「社会主義世界は私たちの学問がマルクス主義の根本的要求に応じるのを認めて」いることを述べているが、東ヨーロッパの比較文学もまたフランスの比較文学へのアンチ・テーゼなのである。それゆえ、たとえエチアンブルをして多少とも幅の広さをフランスの比較文学にあたえる可能性がみられようとも、実際にはまだマルクス主義理論に立脚した比較文学研究の成果はフランスには認められない。『東ヨーロッパの比較文学』^⑦や『ハ

ンガリア文学・ヨーロッパ文学』という二つの論文集はフランス語で書かれているものを収めていることで、フランスの比較文学者たちに東ヨーロッパの比較文学の動向を伝える役割を果しているが、まだフランスではこれを正面切って批判し、見解を披瀝している人はみられないようである。

フランスの比較文学は内外の批判を受けて変化しつつあることは確かであるが、その本質においてはどれだけ変貌しているだろうか。近着の「比較文学雑誌」からは、英語で書かれる論文数の増加が眼につくほかは、とくに変貌を印象づけられることはない。むしろ、きわめて実証主義的な方法による論考がいまなおみられることを認めなくてはならないのである。これは理論より実践の方がしばしば後手にまわるといふ世の慣いのためかもしれない。

最近の理論書としては、一九六七年、アルマン・コラン社からクロード・ピショワとアンドレ・ルソーの共著『比較文学』と、一九七〇年、H・N・ブロックの『比較文学の新しい動向』がニゼー書店から刊行された。後者は六〇ページ余の小冊子で、講演をまとめたものであり、前者にくらべていささかエッセー的であるので、ここでは紙数の都合上、紹介を割愛する。

ピショワとルソーの共著は、フランスの比較文学の第三番目の総括書としても十分注目されるものである。まず最初に序文においてフランス人の比較文学についての認識のありかたを百科事典の記述のうちに検討している。たとえば『二十世紀クラシック・ラール』事典では、『比較』の項において、さまざまな比較の知識に関して、定義づけを試みている。『グラン・ラルース』事典でも同様に『比較』の項があり、さらに『文学』の項の末尾にコンバラチズ

ムの説明がある。著者は比較文学を『文学』と『比較する』の二項に分けて記述されている点に不満の意をみせている。また長年月、この学問が諸国民文学間の事実関係についての研究に終始していたが、これは斯学の学問的な慎重さ、教育制度上の理由など実際の問題への配慮に負うところが大きかったが、現在ではそうした配慮は意味を失ってしまい、広い観点からの研究に入っていることを説いている。すなわち思想の歴史に関する研究はいまや飛躍、発展の途上であり、文学の社会学は独自の学問として確立し、主題史研究は活気を取り戻しているのである。

ピショワとルソーのこの著書は、このように徐々に変貌をみせているフランスの比較文学の現状を含む総括のために編まれたものであるが、すでにギューヤールの総括書は古いときめつけている。フランスの教育制度が改革され、比較文学に関心を寄せることが考えられる古典文学あるいは近代文学専攻の学生数が一九六五年に二千名であったのが、一九六七年には一万五千名と飛躍的に増えており、こうした学生たちのための案内書として、この書物は刊行されているようである。

国際主義を標榜する二人の共著者であるが、その立場はひとりとは歴史、もうひとりとは哲学と異っている。だがそれぞれの方法を弁証法的に駆使して二一五ページのこの著作にとりかかっている。

バルダンスペルジエの論文「言葉と実体」を意識してのことであるが、「実体と言葉」と題する章からこの書物は書き始められている。マルク・ブロックの「名辞の出現は、たとえ実体が先行していたとしても、つねに小さな事実である」という文章を引用している。比較文学の歴史を比較文学という名辞からまかせて考察してい

る。ギリシア文学とラテン文学、十八世紀のフランス文学とイギリス文学……というように、二つの文学が存在するようになり、それぞれの価値評価のためにこれら二つの文学を比較する動きが出てきたのであるが、その時期がいわば比較文学の歴史の前身なのである。そしてフランスにおける比較文学の先駆者として、ヴィルマン、ジャン・ジャック・アンペール、フィラレト・シャルルをあげているが、とりわけサント・ブーヴが「両世界評論」誌に二度にわたって紹介の論文を捧げているジャン・ジャック・アンペールをフランスの比較文学の創始者とみなしているようである。^⑩

スイス、イタリア、イギリス、ドイツなどの比較文学の発達史を概観したあと、第二次世界大戦後の発展のめざましさについて言及し、この書物を書いている時点とこれが公刊される時点の間にさえ変化がみられるほどであると述べている。活動の規模も国際的に拡大し、会議、すなわち大会につぐ大会が重ねられて、いわゆる比較文学者の数も増えた。こうして起源においてフランス的であった比較文学はいまでは世界的になっている。文学上のナショナリズムがなくては比較文学というイデーも生れなかったはずだが、そのナショナリズムが少しずつ払いのけられてきている。

さて、最近のフランスの比較文学では影響の問題についてはどのように考えられているのだろうか。ピシヨワとルソーは、作家（作品）の運命は国内的であると同時に国際的なものであり、それが作家（作品）の実際的価値を示す証拠の総体であるという考えをみせている。成功と影響という二つの面で運命は示されている。成功は数えられ、出版物、翻訳、翻案など数量ではっきり出てくる。一方、影響について云えば、影響研究は発動体を受容体に導き、源泉

研究は逆に流れをさかのぼる。いずれにせよ、組織的な研究が必要で、その場合、研究者の想像力と直感力を信用しなくてはならない。模倣と影響とは明確に区別すべきである。影響にくらべて模倣は文学がその貧困さを意識する時期に多くみられる。一般文学は類似および同時現象が影響作用で説明つかない場合に持ち出されるが、これと世界文学と混同してはならない。世界文学は諸国文学の並列でなく、総括である。

「二つの本質的な点、すなわち対象と方法については私たちの考えは光明に達したものの、答えは相変らずぼんやりしたまゝである。比較文学はなにを取り扱うというのだろうか、二つ、三つ、四つの文化圏内の、地球上のあらゆる文学間のさまざまな文学関係をか？」

ピシヨワとルソーは比較文学とはなにかと自問し、右のような答を出している。結局、比較文学の守備範囲に思想史、比較心理学、文学の社会学、美学、一般文学などを入れ、比較文学は人間の精神の特殊機能として文学を一層正しく理解するために歴史、批評、哲学などによって、国際的規模の文学現象を分析し、比較し、総合的に解釈するものであると考え、文学の国際的交流、一般文学、思想史、さらには文学の構造主義をも研究対象とするのである。構造主義に関しては、それを研究することで文学の国際化、すなわち一層高次元の一般化に向うことができるから重要とみているようである。フランスの比較文学はすでにヴァン・ティエグムの時代のそれではない。だが、すっかり変貌してしまっているだろうか。依然として方法においては実証主義的である。比較文学は類似現象、影響関係などをあきらかにすることで文学を研究するものであり、数個の

言語圏なり文化圏なりに属している事実関係において文学を比較する方法以上の技術であるという概念が、ビショワとルソーの書物の中に認められるのである。比較文学は文学史の一部門としての補助的な役割をいままなお脱却しかねているようである。このような認識はまさしくフランスの比較文学の歴史的認識にほかならないのである。だが、文学史の一部門という認識はきわめて危険性をはらんだもので、比較文学者をして、しばしば文学の本質を見失なわせしめる原因となり、たびたび文学そのものの研究に立ち戻るよう警告されてきたのである。ジャン・マリ・カレも比較文学は人間とともに歩み、人間に到達すべきものであることを強調していたが、これはすでに文学、すなわち人間を見失った比較文学研究の一つの傾向をいましめてのことであった。

アメリカや東ヨーロッパなどでは音楽、美術、建築などとの類似、相違などをとりあげるようになり、すでに文学史研究の補助学問の域を脱している現実の一面を、フランスの比較文学はまだ受け入れていないようであるが、これは、ある意味では、フランスの比較文学が文学そのものにとらわれすぎていることを示しているのかもしれない。

フランソワ・ジョストは「国民文学史は比較文学の一部門である」と述べ、まだフランスの比較文学が文学史研究の学問であるという認識がふっきれていないことを語っている。東ヨーロッパの学者が真剣に考えた『文学理論』としての比較文学への動きをフランス比較文学に求めることはむずかしいのが、その現状のようである。(一九七〇・一一・七)

註

- ① Baldensperger: Le mot et la chose. (Revue de littérature comparée. No. 1. 1921.)
- ② Paul Van Tieghem: La littérature comparée. A. Colin. 1931.
- ③ Marius-François Guyard: La littérature comparée. 《Que sais-je?》 No. 499. P. U. F. 1951.
- ④ René Etiemble: Comparaison n'est pas raison. Crise de la littérature comparée. Gallimard. 1963.
- ⑤ Jean-Marie Carré: La littérature comparée depuis un demi-siècle. (Annales du Centre Universitaire Méditerranéen. 1951.)
- ⑥ Raymond Trousson, Un problème de littérature comparée. Les études de thèmes, essai de méthodologie. 《Situation》 No. 7. Lettres Modernes. Minard. 1965.
- ⑦ La littérature comparée en Europe orientale, Akadémiai Kiadó, Budapest. 1963.
- ⑧ Littérature hongroise, Littérature européenne; Essai d'une histoire de la littérature comparée en Hongrie. Akadémiai Kiadó. Budapest. 1964.
- ⑨ Claude Pichois et André-M. Rousseau: La littérature comparée. 《Collection U2》 A. Colin. 1967.
- ⑩ Haskell M. Block: Nouvelles tendances en littérature comparée. Ed. Nizet. 1970.
- ⑪ 拙稿「ジャン・ジャック・アンペール論」(早稲田大学比較文学研究室紀要「比較文学年誌」六号、一九七〇年)参照。